
一つの朝色

うな

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

一つの朝色

【Nコード】

N2311Y

【作者名】

うな

【あらすじ】

朝の教室、そこで読書をするのがボクの日課だった。

どちらが先かと言えば、多分きつとあの子の方が先だった。

朝練をする生徒たちの群れに紛れて登校したボクがすることと言えど誰もいない教室で読書すること。少し肌寒かったその日も、居心地の悪い家から逃げ出してボクは学校にいた。

六時五十六分。空はまだ薄暗く、廊下から眺める電気のついていない教室は奇妙な静寂に包まれている。

朝の空気。朝の色。すっかり見慣れた光景を儀式のように確かめてボクはそっと教室の戸を開ける。

静寂を崩さないように。自分自身も朝の中に溶けるような心持ちで教室へ入る。

半年。中学に入学してからずっと続けてきたボクだけの習慣。嫌な現実から逃げ出すために物語に潜り込むための最高のシチュエーション。

「？」

引き戸を注意深く開け、上履きの足で教室に一步踏み込んだ瞬間その異変に気づいた。

誰か、いる。

いや、人がいること自体はさして珍しいことではない。運動部の生徒が荷物だけ置きに来ることが偶にあるし、時と場合によっては先生と鉢合わせになったりすることもある。

だが今教室の電気は消えている。弱々しい朝の光が窓から申し訳程度に差し込んでくる以外は光なんてない。

そんな朝色の教室で女の子が一人——見慣れないセーラー服に身を包んで、昨日まではなかった窓際最後列の机に腰を下ろしている。手には革製のブックカバーの文庫本。慣れた様子でページを捲る指使いには一切余計な力が込められていなくて読書家であろうことがすぐに分かった。そして——それは果たして偶然だったのだ

ろうか——彼女が不意に目を向けた、鏡面化した窓ごしに目が合った。

意志の強そうな、少しだけ頑固そうな切れ長の目。一目でクラスの間でないことが分かった。セーラー服以上に、黒目がちなその瞳の向こう側にある底なしの黒があまりに印象的で、一度見たら一生忘れないだろうその顔はけれどボクの記憶にはなかった。

「……………」

「——」

女の子はなにも言わない。ボクは何も言えなかった。

数秒の後、何事もなかったかのように視線が解ける。彼女の目は読みかけのページに戻され、ボクは窓に映った女の子の横顔を数秒ぼやっと眺めてから我に返り焦るような気持ちで女の子の席とは一番遠い自分の席に着いた。

そしてそのまま……読む気もない文庫本を取り出して一応の読書姿勢をとって時間が過ぎるに任せた。

一時間後。物語の中身はまったく入ってこず、壇上で静かに紡がれたアマミヤエコという響きだけが頭に残った。

それから、ボクが習慣の朝読書をする教室には彼女がいつもいた。彼女が転校してきた中一の秋は勿論、簡単な挨拶を交わして彼女が「雨宮エコ」でなく「天見ヤエコ」であることを知った中二の夏も、卒業間近に彼女の引越しが決まった中三の冬もいつだって彼女はボクより先に教室に入り、朝の静寂の中、あの底なしの黒い目で紙面上に綴られた物語を読み解いていた。

「エコはさ、」

その日も彼女のほうが早かった。エコにとっては登校最終日となる2月の厳しい朝も、彼女は何一つ変わることなく皮のブックカバーを被せた文庫本を読んでいる。

何の因果かその時の彼女の席も窓際最後列で、違うところと言え

ば伸ばしっぱなしの黒髪がずいぶん伸びたこと、ブレザーを着ていること、友人一同で開いたクリスマスパーティーの時ボクが用意した交換プレゼントのブックカバーを使っていることぐらい。

「うん？」

随分と言葉を交わしたはずなのに、ボクが彼女に抱く印象にそれほど変化はなかった。エコと気安く渾名で呼びかける今だって、窓越しに見た瞳の深さが頭の奥にこびりついている。

「エコは、寂しくないのか？」

答えは、なんとなく分かっていた。彼女が伸びすぎた髪をくるくると指で弄りながら紡ぐ言葉には少しの不安も見当たらず、

「引越しは、慣れてる。むしろ、こんなに長くいられたことの方が驚き」

まるで他人ごと。パタンと文庫本を閉じて机の上に置き、腕を組んだエコは何か考えるように首を傾げ、一度パチリと瞬きをした。

「一つ質問。瀬崎はどうして読書をする？ こんな朝早く、誰もいない教室で」

声――ほんの少し低めの囁くような音。あの日、アマミヤエコと呟いたものと同じ。

「俺は……居場所がないから。家じゃ親父が飲んだくれてて、母さんはいつも疲れた顔をしてて。学校が一番落ち着けるし、図書館の本はタダだから」

言ってからどうしてエコがこんなことを訊いたのかを考えた。

朝の読書タイム。二年半も一緒にいれば嫌でも相手のことぐらいわかってくる。

エコは知っている。ボクの家庭の事情も、どんな本が好きでどんな言葉に感銘を受けどんな言葉を求めているかを。

ボクは知っている。エコの家庭の事情も、どんな本が好きでどんな言葉に感銘を受けどんな言葉を求めているかを。

知っているはずなのに。

「瀬崎。私が本を読むのはな、見たくないものに蓋をして逃げ出す

ためなんだ。うちの親はろくなもんじゃないよ。多分、瀬崎のうちよりも」

「知ってるよ。全部、エコに聞いた。今度の引越しも、親父さんが問題を起こしたからだって」

全部知っている。朝色の時間、偶然同じ趣味を持っていたボクたちはろくでもないことに似たような境遇の持ち主で。言葉より先に空気で悟った。エコはボクと同じ色の空気を纏っていた。愛されなくて愛されなくて諦めようとして諦めきれなくて――ただ、逃げ出すことを選んだ色。それは瞳の奥に濁った眼光の色だったり、不意に零すため息の色だったりした。

「瀬崎。なあ、瀬崎イチヤ。瀬崎は私のことを知っていてくれるよな？　ここですつと逃げ続けた私のこと、瀬崎だけは分かってくれるよな？」

「それは――――」

頷こうとして急に顔を覗かせた嫌な予感に言葉を詰まらせる。エコは何を思ってたこんなことを訊くのだろう？　聞かずとも分かりきっているはずなのに、何が望みでこんなことを言うのだろうか？

「明日から私の朝に瀬崎はいなんだ。そのことを、瀬崎は分かってくれるよな？」

エコは淡々と言う。いつものように、囁くような声色で。少し、本当に少しだけ声が震えているような気がしたのはボクの願望なんだろうか？

「俺もそうだ。明日から、この教室の朝にエコはいない。だから、分かるよ。痛いぐらい」

痛いぐらい？　いや、違う。本当に痛いんだ。ズキズキ痛む。どこが？　そんなもの身体中に決まっている。

「そう……それなら、いい。もう、平気だ。私も痛いから、だから――――」

それじゃ、とエコは文庫本を置き去りにしたまま教室を後にした。多分、もう戻ってくるつもりはないのだろう。彼女の長い髪が廊下

へ消えるのを見送ってボクは文庫本を手にとった。カバーを外し中身を確認すると、カバーを外されたばろぼろの「こころ」がそこにあった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2311y/>

一つの朝色

2011年11月5日02時07分発行